

【テーマ】

□ 万葉集最後の歌

政争に翻弄された悲運の万葉歌人、大伴家持



番外編・第1号では万葉集の巻頭歌（第1番目の歌）を紹介しました。野原で野草を摘む娘に声をかけて求婚しているあの凶暴な天皇、雄略天皇の歌でしたね。

では、全4516首の“大トリ”となる作品はいつたいだれの、どんな歌なんでしょうか。あと数日で新年を迎えることになる年末の今号では、新しい年を迎えるにふさわしい歌でもある、万葉集最後におかれた作品を紹介することにします。

公民館だより

2018年12月21日（金）

番外編・第11号

奈良市生涯学習財団 二名公民館

館長 上田善紀・発行

新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事

大伴家持 卷二〇―四五一六

新しい年のはじめの初春の今日、めでたくも降る雪のように、いっそうよいことが重なるように…。

古代人にとつて、雪は格別な思いをもって受けとめられていました。その雪が、なんと正月に降ったのです。吉兆です。しかも、この年は偶然にも元日と立春とが重なる、またとない暦（＝歳旦立春・19年に1度）でした。めでたさは格別だったことでしょう。家持がこの歌を作った当時、因幡（鳥取）の国守の地位にありました。いまでいう県知事です。といっても左遷です。家持の上司、左大臣 橘 諸兄が亡くなり権力は藤原仲麻呂に移ります。時に家持41歳。この後薩摩へ、最後は多賀城（宮城）で没しました。家持はこの歌を最後に歌を残していません。

※今号のタイトルにふさわしい大伴家持の生涯については、最終号で詳しく触れます。

ところで、この歌の第1句「新し」は「アタラシ」と発音します。「アタラシ」じゃないの？実は「新し」という語は、時代とともに「アタラシ」と変わっていきます。ほら、新しいことに変えていくことを「改める（アラタメル）」というでしょう。古語のなごりです。

こうした言葉の発音が変わることを国語学の専門用語で「音位転換」といいます。例えば「山茶花」。もとは「サンザカ」でしたが、時代とともに「サザンカ」に変わりました。「だらしな」は、もとは「シダラナイ」。ほら、「ふしだら」という言葉がありますよね。

先日、TVで元大阪市長の橋下徹さんが「雰囲気」を「フインキ」といつているのを私は確かに聞き留めました。中学生の読みのテストでよくある間違いなんです。これなんか、数十年もすれば「フインキ」も正しい読みとして辞書に載ることになるでしょう、きつと。